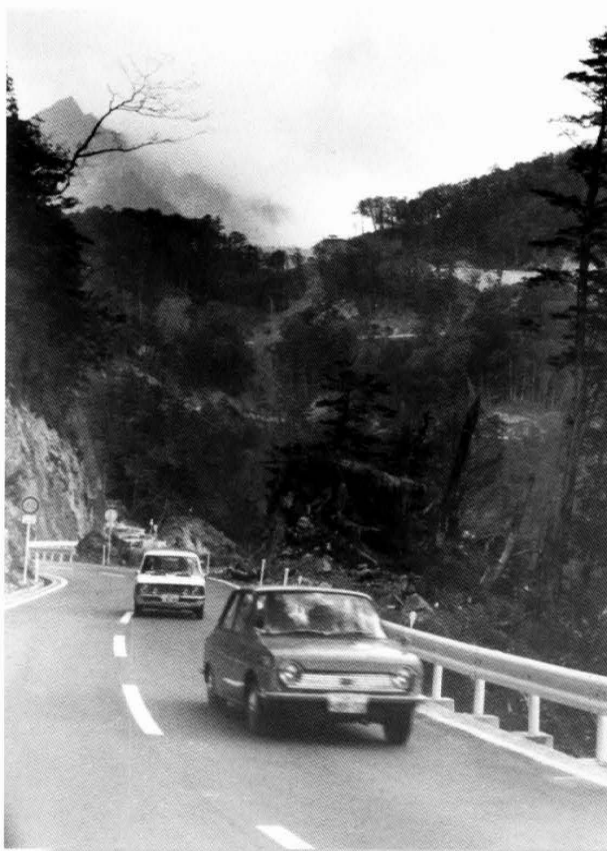
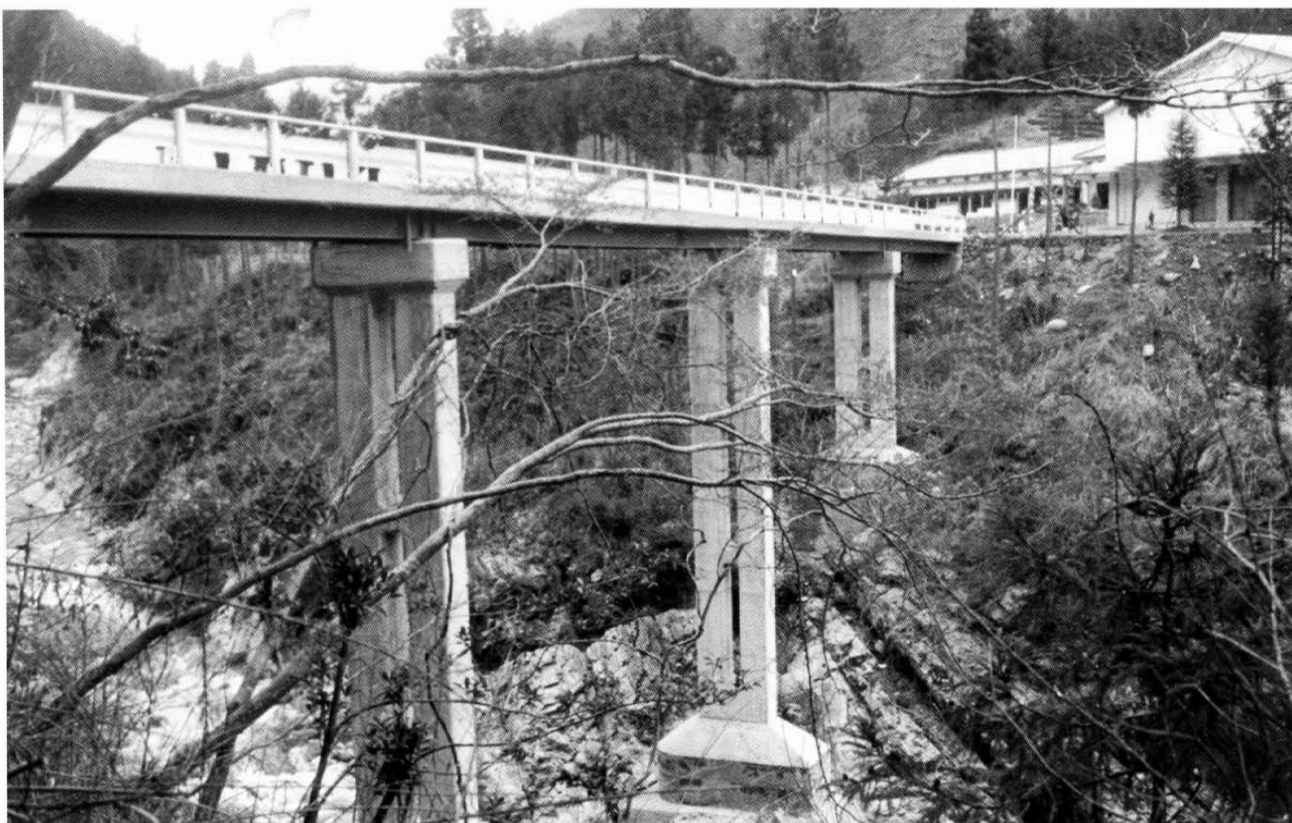


昭和45年 〜 49年

1970～1974



昭和45年9月、石鐘スカイライン開通



変化に富んだ溪谷美に包まれた通学専用橋「面一橋」

校門シリーズ△78▽面河第一小

2つある通学橋

学校の運動場を挟み、面河川の溪谷に「∩」の字型に架かる二つの通学専用橋。「小さな学校に通学橋を二つもつくってせいたくな……」ともいわれるが、これには学校の歴史が秘められている。

面河第一小は元の面河、城山両小学校が統合されて二十八年に発足、校舎は面河村通仙橋の溪谷沿いの地に移された。かや場を切り開いて校舎や運動場がつけられ、学校の東側には長さ四十メートルの木橋「河口橋」ができ、児童たちはこの橋を渡って登下校していた。しかし、学校の西の方向に当たる本組地区の児童たちは、この橋だと回り道になり、通学距離が^キほど長く、なるので不便であった。同地区の児童は当時、全校の約半数を占めていたが、行楽シーズンともなれば面河溪に行き来する観光客の車に出合い、しばしば立ち止まる状態で危険でもあったという。

このため同地区の父兄らは、統合の当初から学校の西側に橋をつけてほしいと関係者に陳情し続けてきた。「子供のためなら地区有財産の山林を処分してもよい」との意気込みで架橋運動が進められ、やっと四十三年、十数年來の念願がかなえられ、二千万円を投じて、長さ六十メートルのコンクリート橋「面二橋」が完成した。

一方、過疎化現象で児童の減少が著しいが、この新学期、久しぶりに学校内に活気がよみがえってきた。これは今春、面河溪入り口近くにあった若山小が面河第一小に吸収統合され、児童仲間が四十人ばかり増えたことによるもの。児童たちは純朴で素直である半面、これまでよい意味での競争心、フアイトに欠けるきらいがあり、学校教育の上からも大きな障害になっていた。学校では「子供に活気を持たそう」と二年前から剣道をはじめ、今では半数近くの児童がこれに参加するまでになっている。

(昭和45年4月17日)

父兄らコツコツと山削り通学路づくり

駐在さんの提唱実る

石鏡スカイラインの開通で、交通ラッシュを招いている県道久万―西条線の五^キの道を、上浮穴郡面河村本組の子供たちは、朝夕、車の間をぬって登下校、面河第一小学校へ通っている。「小さな生命を守り、危険からさよならを――」と願う同校区父兄たちは、とうとう山の中に新しい通学路を求めて、山を削り、道づくりを始めた。

「車の波の続く長距離道をよく今まで無事で――」とこの新通学路づくりを提唱した、久万警察署洗草駐在の山田義明巡查長(四^七)はホッとした表情。登下校指導に走ることに「児童と車の対決」にヒヤヒヤの連続だったという。早朝の登校時は、現在県道が、スカイライン導入路として、ラッシュ緩和策の待避所づくりや拡幅の工事最中であるだけに、工事車の通行が多く、下校時には、ちょうど、スカイライン帰りのマイカー、観光バスが走るころという車ラッシュのダブルパンチ。「あわてる登校、ふざける下校」といわれる登下校の児童風景には、あまりにも危険が多すぎる。

本組から面河第一小へこの県道を歩いて通う児童は四十五人。犠牲者が出てからでは遅いと山田巡查長は、代替通学路づくりを父兄に説いて回った。県道とは面河川を挟んだ山の中に、本組―面河第一小を結ぶ約五^キの既設山道があり、うち校庭裏から一^五ほどのうさぎ道を除いては格好の通学路候補道。「この一^五を拡幅整備すれば――」と父兄も乗り出し、通学路建設に委員会を結成、父兄奉仕で作業が行なわれるなど話はスムーズに運んだ。

農繁期を終えた六月十六日、父兄第二陣約十五人が、さっそく、ツルハシ、ハンマー、ミノを手に、文字どおりの「コツコツ作業」の道づくりがスタート。岩を削つての道路拡幅と並行して、急傾斜道へは転落防止網を張り雑草を刈るなど新通学路目指して急ピッチ。二日も早く、車の危険から守つてやらねば――と大張り切りでもあるだけに、今月中には、車ラッシュ、県道を対岸に見ながら、この新通学路で児童たちは登下校できることになりそう。

(昭和46年6月18日)



山を削り新しい通学路づくりを目指す父兄たち

デラックスな放送施設

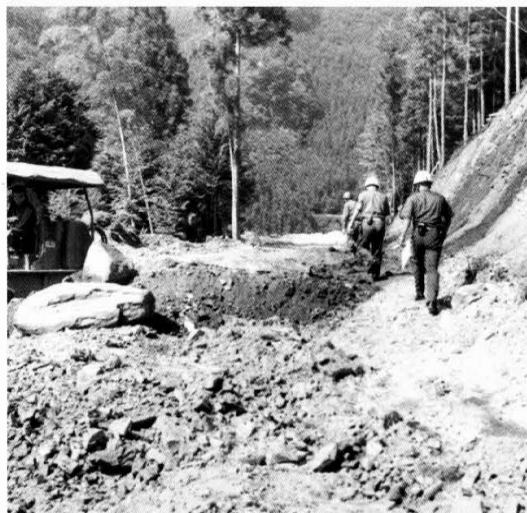
全教室に校内電話機も

「山の小さな学校というイメージはないでしょう」と上浮穴郡面河村、洪草小学校の中川和広PTA会長が鼻を高くするのは、同小の教材の充実ぶり。ステレオ放送もできる校内放送施設、カラーテレビ二台をはじめ、各教室には六台の白黒テレビ、校内電話機、訪問者と受け答えできるドアカメラなど。

これらは、同小の先輩で、現在東京で工務店を営む松本延幸さん^(四)からの贈りもの。このほか、同小の校門、八ミリ映写機などもあり、総額で約百五十万円という。(昭和47年2月7日)



自慢の放送施設を使う児童



開通へ急ピッチの通学路「昭和線」の工事

通学道、近く開通

上浮穴郡面河村の面河第一小学校の通学道路「昭和線」は、陸上自衛隊の手で急ピッチに拡幅工事が進み、九月十三日に開通する。

この「昭和線」は、面河第一小と同村本組を結ぶ約二・四^{キロ}で、小学校寄り二^{キロ}は車の通れないうさぎ道だったものを幅員五^{メートル}に拡幅している。七月十五日の起工以来、陸上自衛隊員延べ千八百人とブルドーザー、コンプレッサなど大型機械八台がフル回転していた。

ただ、同線は下を面河川が流れ、対岸には面河溪、スカイラインへの導入県道久万―西条線が走っており「景観破壊」に対して住民らは過敏なだけに、同線工事施設隊長、矢野庄司^等陸尉も「時間と労力がかかっても、景観を必要以上には壊さないよう慎重を期した」と話している。

(昭和47年9月7日)

「面河少年の家」オープン

桑原小(松山)が初利用

上浮穴郡面河村和歌山の「面河少年の家」の開所式が、十月九日午前九時半から行なわれた。また同少年の家での第二号集団生活をする事になった松山市の桑原小学校六年生約百五十人も午前十一時半、少年の家に到着、にぎやかな受け入れ式も行なわれた。

少年の家は標高六百六十^{メートル}、面河溪入り口関門まで約二^{キロ}の所にある元の若山小学校。下を流れる面河川を挟む樹林は、紅葉まであとわずかとあつて二段と美しく映え、バス三台に分乗してやつてきた桑原小学校児童らは、出迎えた関係者から盛んな拍手を受けて、さつそく三泊四日の自然の中での生活体験を始めた。

(昭和46年10月10日)



「面河少年の家」にやってきた桑原小学校6年生の受け入れ式

奥さん方出番です 中組婦人会

面河万歳の灯守る

面河村は県下のなかで過疎現象が最も著しく、住民も意気消沈しがちだが、「これではいけない」と主婦たちが立ち上がった。中組婦人会(青野多恵子会長、四十九人)は昨年九月、再発足した。十一年ぶりの復活である。

三味線、太鼓、拍子木に合わせて踊る面河万歳は、動きが激しい。独特な調子で鳴らせる三味線は、楽譜があるわけでもなく一番難しい。まだ手がけて日は浅いが、厳しい練習のかいあって、婦人会員の三分の二は、この郷土芸能を二心こなせるようになった。

主婦たちは、晴れの舞台に立つことを目標にはしていない。多少なりともおなかの脂肪がとれ、美容のためにもよい——という主婦たちが、師匠の代役を務まるようになるには、まだ二、三年はかかりそうだという。(昭和45年6月12日)



「古くから伝わるものを捨てたくない」と練習に励む婦人会員

石鎚の飲み水は合格

婦人らが「日水道技師」

久万保健所と上浮穴郡面河村では六月九日、郡内五カ町村の婦人代表十人に「日水道技師」を委嘱、石鎚山土小屋の「国民宿舎」など宿泊所へ給水している簡易水道の現地視察を行なった。

「日水道技師」を委嘱された面河村の高岡美津子さん(三)ら十人は、久万保健所の藤原浩予防課長の案内で石鎚スカイラインを登り、土小屋水源、浄水施設を見て回った。まず水源地の番匠谷では、「このまま飲んでもいいくらい」とため息を漏らすほどの澄み切った山水がたたえられていたが、半面、揚水ポンプ室が整備されていない。水源地がスカイライン沿いのため「観光客が立ち入らないよう柵の必要があるのでは」などの意見も出されていた。(昭和46年6月11日)



石鎚スカイライン沿いの水源地を視察する婦人ら

新年迎える伝統の行事

「としとりくいぜ」

面河ダム近くの上浮穴郡面河村等方妙、農業山口幹太郎さん(六)方ではいろりを囲んで新春を迎えた。

大みそかにはいろりの四隅から檜の太い生木がくべられた。いろり脇の壁には神棚がつくられ、おん松とお重ねの餅が供えられた。いろりを囲んで酒を酌み交わしたり、食べたりにながらこの二年間を振り返り、ともかく無事に過ごしてきたことを喜び合い、気分を一新して新年にのぞんだ。

これは「としとりくいぜ」と呼ばれ、縁起を担いでこの火は長持ちさせるといふ。元日には「としとりガキ」といって、軒につるしておいた干し柿をみんなが一つずつ食べるが、宝を残す意味から二年間使ったいろりのすずを神様に供える行事は今では廃れてしまったという。(昭和46年1月1日)



古里のよさが残されている「としとりくいぜ」の行事

キジ飼育で過疎化対策

キジの委託飼育を目指す上浮穴郡面河村へ六月十七日、日本キジ、コウライキジのヒナの第一陣約百七十羽が興入れしてきた。月末までに千三百羽のキジが来ることになっている。キジの飼育は「労力一日十分」といわれるほど手間が省け、若者の少ない高齢層、婦人労働で賄えらるとあって、過疎化の進む同村では格好の副業となり、加えて「キジのいる村」として観光産業へも利用したいと委託飼育をスタートさせたもの。

同村での委託飼育農家は、笠方梅ヶ市地区を中心にした十三戸の「日本キジ飼育組合」（小椋民雄組合長）。同日は約一時間ばかりで黒森峠を越して同村入りした日本キジ七十羽、コウライキジ百羽だが、疲れもみせず元気いっぱい。さっそく組合農家へ引き取られていった。

なおこの委託飼育による委託者のもうけは、一口につき四十五羽のキジを百二十日間飼育するとして、餌代などを差し引き、約四万九千円が見込まれている。

（昭和47年6月19日）



面河村へ興入れしてきたふ化1カ月のキジ（宮崎さん方飼育場で）

農協合併は動き活発化

4月1日目指して

上浮穴郡久万町、美川村、面河村、柳谷村の四農協は、四月一日を目途に合併を目指すことになり、二月十七日午前十時から久万町役場で、関係者ら約五十人が参加し「久万郷農業協同組合合併推進協議会」を結成した。

郡内でのこの農協合併の機運は、四十五年発足した関係組合長による農業基本構造対策委員会、農協合併研究会などを通じ、農業経営規模拡大や生活環境の整備、さらに農協の体質改善などの面から、農協機能が十分発揮される適正規模へ拡大―合併に決まった。しかしこの間、小田町農協からは、地理的条件、経済圏の相違から郡内二町の合併推進には困難性があることされ、今回は、小田を除く久万郷四農協で合併を進めることになった。

（昭和48年1月19日）



久万町で開かれた久万郷農協合併推進協の結成大会



村名改称40周年記念式で村歌を披露する浪草小児童鼓笛隊

昔の名前は……「柚川」でした

面河村、改名して40年

上浮穴郡面河村が、村名を現在の面河村と改称して今年で満四十年。三月一日、面河中学講堂で改称四十周年記念式が開かれ、記念してつくられた村章や村歌が披露された。

同村は明治二十三年、柚野村と大味川村が合併、柚川村と呼ばれていたが、昭和八年、面河溪が国の名勝地に指定されたのを契機に、昭和九年に名を改称したもので、式には歴代村長らも出席、四十年の道のりなどを話し合った。

面河村となつてからの人口は、昭和二十四年の五千二十八人をピークに、以後は過疎化の一途、現在では千九百三十人。しかし中川鬼子太郎同村長は「現在では年間八十万人の観光客を迎えるようになっており、今後は観光立村も目指す文化的環境整備で、住みよい豊かな村づくりを行いたい」と四十年目への決意を述べていた。

式は歴代村長、議員らの自治功労者表彰のあと、四十年目にしてできた村章、村歌が披露された。村章はひらがなの「お」をデザイン化し、「面河名物」紅葉を散りばめるなどしたもので、村歌は同村出身の小野興二郎さんが作詞、同村石墨小伊藤深校長が作曲したもので歌詞は次のとおり。

『四国の屋根の石鎚を

いたたき仰ぐ伊予の国

そのままどりの山脈の

極まるどころ谷深く

わがふるさとの村はあり

おゝわが面河とこしえに

村はわれらの誇りなり』

(一、二、三番略)

(昭和49年3月3日)

伝統は生きているシリーズ⑭ 久万山の茶

約300年前から栽培始まる

増産態勢も万全

茶摘みが始まるのは、歌の文句にもある通り「夏も近づく八十八夜」の前後とされている。しかし上浮穴地方は、それより少し時期が遅れて、五月下旬に一番茶が摘まれる。

やはり高冷地のせいだろうか。このため、市場で新茶が取り引きされるときは、どうしても不利をまぬかれないという。

●松平定行が奨励

上浮穴地方の茶は、松山十五万石の藩祖松平定行が栽培を奨励したことによって始まるという。藩の記録『松山叢談』に、八御領内久万山は、深山不毛の地多く、公(定行)思召にて、宇治より茶の実御取寄、所々へまかせられしが、其以来年々実ばえして、次第に茶山多くなりしに、中頃、茶の景気薄く、只晩茶を取れるのみなりし……(口碑)▽そう書かれている。

このころ、久万山といったのは現在のの上浮穴郡から小田町を除く、その他の全町村を含めて総称したものである。小田町は、大洲領になっていった。定行の治世は、寛永十二(一六三三)年から明暦四(一六五八)年だから、その間のことになる。

植えられたのは山畑の畦や溝に沿ってだったものと思う。藩政時代を通して久万山の茶はそんなところに育った。いまでも山々の斜面には、至るところにその名残があり、これを山茶と呼んでいる。それが園茶として栽培されるようになるの

は、明治以後のことだったらしい。

「面河村の茶は、いまも山茶と園茶が半々。山茶は在来のものであるが、肥培管理ができないので品質も生産量も落ちる。将来は園茶に切り替え、その面積を広げる方針です」——面河農協の重見組合長は、昨年十月に組合の製茶工場を新設、オートメーションシステムの最新鋭製茶機を導入したので、将来の増産体制は万全だと語った。その最新鋭機が、早くも今年の新茶を盛んに作り出していた。



摘まれた原茶は最新鋭機にかけてたちまちのうちに製品になる(面河農協製茶工場)

●米の代わりに茶栽培

お茶は中国から渡来したものである。延暦二十四(八〇五)年、僧最澄が唐から種子を導入し、比叡山のふもとに植え、その翌年には弘法大師も中国産の種子を持ち帰って、全国行脚のとき各地に植えた、と伝わる。しかし、当時の茶はきわめて貴重なもので、もっぱら薬用として求められたに過ぎない。

茶を飲むことが、かなり一般的な風習となるのは、建久二(一二九二)年に、禅僧榮西が宋から種子を持ち帰って、茶業を起すのと共に、その産地が各地に広がり、次第に茶は上流階級から庶民の間にも普及するようになる。江戸時代には煎茶が広まり需要も上昇して、その栽培は諸藩の殖産事業として奨励されるようになったようだ。伊予の国でも、久万山のほかに東宇和、喜多、北宇和、新居、周桑などの各地で、茶の生産が盛んだった。その伝統が今もそれぞれの地に受け継がれている。ことに、久万山は茶どころとして知られていた。

久万町誌資料集『久万山手鑑』によると、元禄四(一六九二)年に、久万山の村々で生産された茶は、十五万四千二百四十三斤(約九万二千五百キ)だった。米の生産がほとんど期待されない久万山のような山村で、茶は、もともと貴重な換金作物であった。

●茶が原因の一揆

この茶が原因となつて、前代未聞の大騒動が久万山に起こつたのである。寛保元（一七四二）年の農民一揆だった。本をただせば松山藩の失政といえる。久万山三千の農民がこぞつて村々を捨て、大洲領に逃散したのである。逃散は為政者に抗議する農民のデモンストレーションだった。

『松山叢談』によると、原因とみられるのは、当時生活難の村が多かつたところに、米価が上がると、一方では茶の値が下がった。農民は年貢も納めることが難しくなり、藩に対して納税の減免を嘆願していたのである。しかし、これに対して藩の当局者は、少しも農民の苦しさを理解しようとはせず、その訴えを聞き届けなかつたらしい。

年貢は米で納めるのが原則だが、それができない地方では、米価を銀に換算して銀納させるか、大豆や茶など、その地方の特産物を現物納入させる方法が取られていた。久万山地方は、米のかわりに茶銀か茶の現物をもつて年貢としていたが、茶を米に換算する率が問題である。米価が上がつて茶が値下がりしたのだから、久万山農民の不利は覆いようがない。ついに農民の怒りが爆発し、七月になつて非常手段に訴えたのであった。

事件の経過を述べた記録からみて、これに対する松山藩の処置は適切であつたとは思えない。代官などの説得工作ではらちが明かず、菅生山大宝寺に頭を下げて調停を依頼した。

事件の決着は、農民が藩に対して提出した要望事項の大半を、当局が聞き届けるということにかつまつた。一揆の首謀者は極刑に処せられるのが通例であるが、このときは農民側に一

人の犠牲者も出ていない。年貢の軽減も認められ、一揆が成功するという珍しいケースで、三十余日に及んだ騒動に終止符が打たれた。この事件は、松山藩上層部の勢力争いも絡み、藩政担当者の更迭、処罰という政治問題にも発展していったのである。上浮穴地方の茶には、そんな歴史が秘められている――。

●県内生産量の30%

上浮穴地方に産する茶は上質だという。製品のほとんどは高知に出荷されているが、一部は「観光茶」と称し、お土産品として売り出している。わざわざ松山から注文するものもある。

県では、昭和四十二年に茶園の奨励計画を立て、県下の五地帯に栽培地域を指定した。東予中山間地帯、肱川流域、宇和盆地、喜多中山地帯、それに上浮穴山間地帯である。いわゆる久万、面河、美川、柳谷の各村が指定されている。この計画によつて、県内の需要に対して七〇%まで自給できるようにするというのである。

昨年は、県下の総生産量四百二十ト（三百六十七ト）に対し、上浮穴山間地帯は約三〇%の百二十四ト（百三十ト）を確保、昔ながらの「茶どころ」の面目を保った。今、上浮穴地方の農民はもつとも忙しい。新茶の値は出荷が一日遅れると、それだけ安くなる。短期間の勝負だという。以前なら、この時期に学校の農業休校もあつたほどだ。今月いっぱいでは一番茶が終わる。二番茶は七月上旬、三番茶は八月上旬である。

（昭和45年5月31日）



八十八夜から旬日遅れて始まる面河の茶摘み。かつての山茶も今では見事な園茶となつている（後方の建物は製茶工場）

「乗客5人以下」16路線も

マイカー増が拍車

「へき地の不便さに輪をかけるような《足》の切り捨てはしないでください。私たちはそこで生活しているのです」と住民は訴える。「とはいっても、乗客者は減る一方。赤字路線の廃止は、企業としてやむを得ませんでしょう」とバス会社。人口が減る一方の過疎町村、上浮穴郡内の山間へき地を走るいわゆる「路線バス」は、その縮小廃止がクローズアップされ始めている。

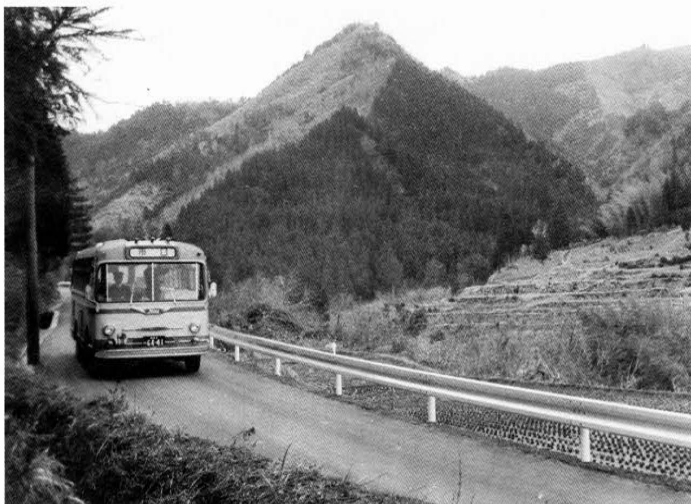
●減る人口、残る赤字

郡内は、国道33号線を幹線に国鉄バスと伊予鉄バスが走っているが、昭和四十四年六月、伊予鉄バスが行なった調査によると、十六の路線区間で「乗車密度」が五人以下という結果が出た。この乗車密度というのは、たとえば、バスがA—B区間を六往復するとすると、その六往復間の乗客者数を便数六で割って出た数字。

この乗車密度で、五人以下の路線は休廃止やむなし、五人以上—十五人以下の場合には「生活路線」として、市町村と協議して走らせる。十五人以上はバス会社として走らせる——これは国が示した数字だと白方清春伊予鉄バス久万営業所長は説明。

「公共性の強いものだけに走らせたい考えには変わりないが、郡内では年間二千万円から二千五百万円の赤字が出ているのが実情」ともいう。

同郡は、県下最大の七百二十四平方キロメートルという広い面積を持つが、人口は現在約八千世帯、二万七千人。昭和二十五年の約五万人と比べると半数の激減ぶり。「乗車密度五人以下」も、この人口減が最大要因だが、加えてモータリゼーションの波は、過疎化とは反比例して押し寄せ、郡内自家用車数は、普通車が千八百台、軽四輪自動車八百台、オートバイなど約二千台というマイカー増の影響も大きい。



縮小廃止がクローズアップされる中を走る「過疎バス」(面河村市口で)

●住民には生活路線

これに対し、面河村市口、農業渡辺茂松さん(五七)は「便数が少なく、利用したくても乗れない。松山へ出かけると、乗ったバスで折り返し帰らないと

もう便がなく、一泊というハメになる。洪草の役場へ行くにも朝七時に出ても、帰る便が午後四時では」と訴える。ただ急がない時は、洪草—市口間のタクシー代金約八百円をもうけるつもりでバス待ちすると苦笑する。

また同村洪草の面河第一小学校では、先の三学期から午前八時十五分の始業時間を午前八時五十分に繰り下げた。これは、同校区若山地区の子供たちが通学バスとして利用していた面河—通仙橋間の便が、割石—通仙橋—面河—通仙橋という折り返し便となり、若山地区の子供たちの学校着は午前八時四十分となったため。

「五人以下路線」だが、面河村にとつては「生活路線」のため、同村では、四十六年から伊予鉄バスに対し、小中学生の定期バス代を含め、運行負担金約三百万円を出し「走ってもらっている」。

●過疎化との悪循環

バス会社側からは縮小廃止も「やむを得ない」ものでも、住民にとつてはそれではすまない。さきの渡辺さんも「これ以上、足が奪われたら生活できないかもしれない」と悲愴。同村では病人患者については、診療所の車で送ってもらったりもしているが、過疎化はなお続きそうな郡内山間へき地の足確保は容易ではない。

「過疎化が生みだした過疎バス問題」とすれば、過疎化の対策が先決だが、過疎バスが過疎化への引き金ともなっていくという悪循環が繰り返され、同郡では機会あるごとく、県に対しての足確保を訴えている。

(昭和45年4月17日)

渓谷にテント林立

涼を求めて県外組も

真夏の太陽さえ、木陰に遮られる上浮穴郡面河村。面河渓は、緑と渓谷のせせらぎを求めてやってくるキャンパーたちで大にぎわい。八月五日の夜は宮崎から、高知から……と、県外組も大勢繰り込み、約二百人のキャンパー客が集まった。

この夏最高のキャンパー客に、松山営林署が管理する第一、第二キャンプ場、面河村の鉄砲石川キャンプ場には、三十を越すテントの花が咲き、日が沈むとともに、夕食づくりの煙が渓谷に立ち込めた。カンテラを囲んで飯ごうのご飯をほおばりながら、やがて歓談の輪が広がり、いよいよクライマックスを迎えていた。

(昭和47年8月7日)



テントの花が咲いた5日夜の面河渓キャンプ場

山の観光は快適に

主要地方道が春までに大半舗装

「デコボコとホコリ」が代名詞のように酷評された、上浮穴地方の観光地への主要地方道だったが、郡内を走る四本の久万土木事務所管内の主要地方道は、三月末にはその八三%が舗装、四十八年度中には全線舗装され、凸凹道とさよならする。

面河・黒森峠道で知られる川内(温泉郡川内町)―大味川(面河村)線は、一九三キロ。全線が三月いっぱい舗装される。今年には暖冬とも重なって、舗装工事もノンストップで行なわれ、現在では面河ダム付近一部を残すだけとなっている。

(昭和48年2月12日)



面河ダムと並んで走る黒森線も舗装が着々と進んでいる

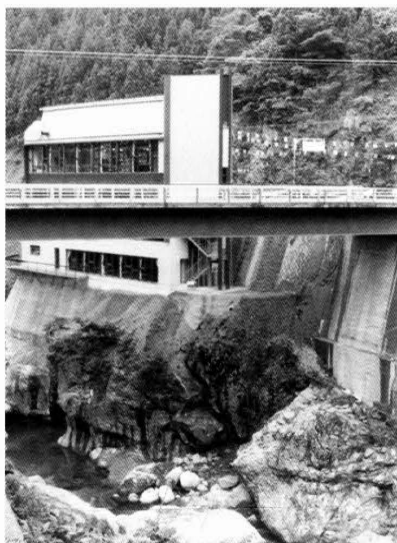
村営観光産業センター完成

上浮穴郡面河村、面河溪関門の石鎚スカイライン入り口に、このほど村営の観光産業センターが完成、六月二十四日午前十二時から、関係者約百五十人が参加、落成を祝った。

完成した観光産業センターは、鉄骨三階建て約四百四十平方メートルで、二階は喫茶室、二階はお土産品や民芸品展示売り場、三階は七十人―百人収容の食堂。総工費約三千三百万円。

石鎚スカイライン入り口面河渓谷に建ったこのモダンなセンターは、さつそく店開き、七月二日のお山開きなどに格好の休憩所として、面河溪、スカイラインなどへの観光客の「足止め」を狙うとともに、「糞尿とごみと排気ガスだけが残されていた」同村の観光立村の第一歩として期待されている。

(昭和46年6月25日)



完成した面河観光産業センター

松山のチビっ子呼びかけ

昆虫を森や林に返そう

面河の勉強会でクワガタ放つ

「昆虫はかごの中より自然の森の中の方が好きなようなの」——上浮穴郡面河村面河溪谷でこのほど、二匹のクワガタ虫がかごから放された。「昆虫採集はやめましょう。そして虫を、野に林に森に返しましょう」という松山・野鳥を守る子供会会長雄郡小学校四年、越智恭子さんⅡのメンバー十七人は、野鳥や昆虫はどんな所が好きなんだろう——と、八月三日から二泊二日のキャンプで面河溪谷を見て歩き勉強した。

名付けて「森の学校」。「鳥や虫を守るためには捕らないことはもちろんだが、まず、鳥や虫が住んでいる自然環境を守つてやらねば駄目です」——松山営林署面河担当区、大原敏男主任や日本自然保護協会四国支部、峰雲行男事務局長らがそれぞれ「講義」。ちよびり難しいけれど、自然と鳥や虫と、そして人間とのつながりについて話を聞いた。

同会チビっ子メンバーは、先ごろ伊予市大谷池のカモを守ろうと訴えたGメンたちで、松山市小栗町の斉郷隆喜ちゃん(四つ)も母親や姉さんといっしょに参加。また同市末広町、雄郡小学校二年杉野文恵ちゃん(七つ)は、おばあちゃんにももらった「宝物」クワガタ虫を、森に返すためにやつてきた。
(昭和48年8月6日)



「虫を森に返そう」とクワガタ虫を放す
杉野文恵ちゃん(面河溪で)

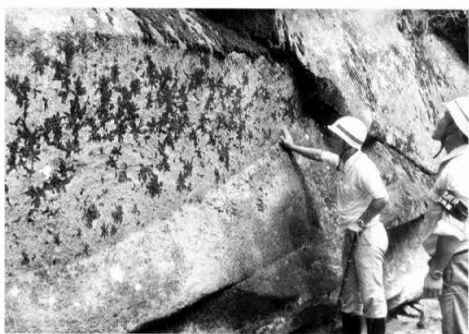
「モミジ石」ベール脱ぐ

天然記念物級の珍品

紅葉の葉の化石を思わせるような黒い鉱物がついているところから「モミジ石」と呼ばれる岩盤が、このほど上浮穴郡面河村、鉄砲石川で「再発見」された。

モミジ石は、花こう岩の白い岩膚(いわはだ)に黒い針状の結晶が放射状に集まっている電気石で、鉄砲石川での名物になっている。しかし、現在まで知られていたのはほんの一部で、すぐそばの長さ十メートルにわたる大岩盤からも姿を現した。これは、松山営林署面河担当区の菅頭「さん」(三)らが、コケに覆われて隠れていた「知る人ぞ知る」だけだった電気石を「観光客にも楽しんでもらおう」と、ベールとなっていたコケを取り除いたもの。天然記念物級の珍品だけに、菅さんらの作業も慎重、コケを二つはぎ取るという大手数となっていた。

(昭和48年8月26日)



コケのベールを脱いだモミジ石(鉄砲石川で)

寒さにも負けない「四土用桜」

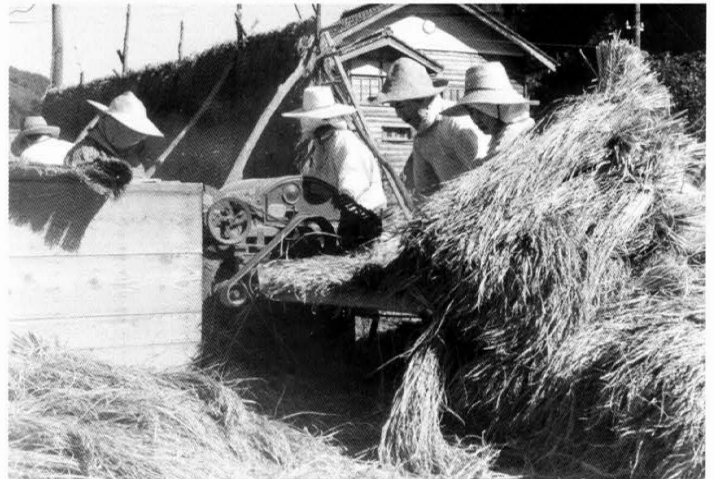
もう雪が降っても不思議でない冷え込み続きの上浮穴郡面河村。標高八百メートルの相の峰に桜が花をつけている。一見、樹氷かと思われるほど。

しかし「狂い咲き」ではない。この桜は年四度、春夏秋冬それぞれの土用ごと花を咲かせるところから「四土用桜」と呼ばれるもので、今、咲いているのが秋の土用の分。今年四度目で最後。「もう相当の樹齢なんですよが、四度咲くことだけは忘れないようだ。しかし花の数は少なくなりました」と庭先に咲く桜を見上げて青木徳長さん（八五）。「雪がチラホラする中で花をつけているなんてかわいいそうですよ」と妻のタケさん（七五）。

うわさを聞きつけ、松山などから「挿し木にするから」と枝をもらいにくるマニアも多い。「しかし花を咲かせたということは聞かんが、どうなっておりますか」。青木さん夫妻は、町へ行った「孫」が気掛かり。
(昭和48年11月18日)



今年4度目の花を咲かせた桜



珍しくなった脱穀風景。稲束が休みなく流れてくる(大味川で)

冬はそこまで

面河村大味川地区では一足早く脱穀の真っ最中。最近では稲の刈り取りと脱穀を同時に済ませるコンバインの普及で、脱穀機は姿を消しつつある。だが、この地区では耕地が狭いためコンバインが使えず、今でも脱穀機が大活躍。足踏みの旧式のものこそ見られなくなったが、モーターがうなり「タン、タン、タン……」と昔懐かしい機械音を山間に響かせている。稲木に掛けられ約一カ月、十月下旬の天候不順で例年より遅れているというものの、手にする籾の重みに農家の表情は明るく収穫の喜びがあふれている。
(昭和49年11月5日)

つららの花

十一月でゲートを閉ざした石鎚スカイライン。石鎚山はすっぽり雪に包まれ、厳しい冬山の様相を見せ、清水の流れていたスカイラインの谷間も鋭いつららの花。
(昭和48年12月6日)



厳しい寒さでスカイラインの谷間にできたつららの花

やつと新たに100台分

「動脈硬化」の面河溪入り口に駐車場

上浮穴郡面河村の国定公園・面河溪の入り口付近に駐車場ができた。これは県が、地元的面河村から用地の提供を受け、二千四百五十万円をかけて作ったもので、広さ二千四百平方メートル、普通乗用車に換算して百台が駐車できる。

面河溪への観光客は、秋の紅葉のシーズンに集中、ピーク時には一日二千台を越す車でごった返す。これに対して駐車場は、これまで面河国民宿舎前、溪泉亭前など、みんな合わせても二百五十台程度の収容能力しかなく、このほとんどは、臨時的に建設中の石鎚スカイラインに駐車させていた。新しい駐車場の誕生で少しはよくなるものの、これまでの例から、とてもシーズン時の交通渋滞を解消するまでには至らないと見られている。

(昭和45年2月19日)



面河溪入り口付近に完成した駐車場

スカイライン開通控え

石鎚登山大にぎわい

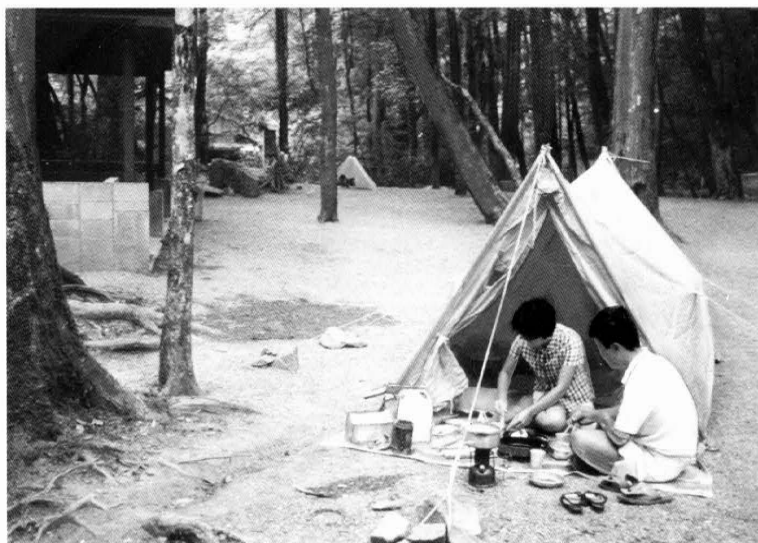
自然休養林内に有料キャンプ場も

西日本の最高峰石鎚山は、連日夏山を楽しむ人たちでにぎわっているが、石鎚スカイラインが供用開始になれば、長い距離をてくてく歩いて登る登山者は大幅に減るものとみられている。

山頂小屋の話によると、石鎚山はここ二週間ばかりは天候に恵まれ、土曜日で千人、平日でも五百人が訪れるという。西条市側からロープウェイを使って登る人が多いが、上浮穴郡面河村の登山口から愛大小屋を経て登山する人も一日百人を下らない。

面河村関門から土小屋に通じる石鎚スカイラインの供用開始は九月二日の予定。これができるば、土小屋から山頂までわずかに二時間で楽に登れることになるが、「その前にぜひ登り、ほんとうの山のよさを味わっておきたい」という人も多い。山を愛する人たちは、山が俗化されて自然が破壊され、ごみのたまり場になることを心配しているが、国民宿舎「面河」の藤原支配人は「観光客は増えるにしても、面河から何時間もかけて登る人たちは半分以下に減るだろう」といつていた。

一方、面河村亀腹から石鎚登山口にかけての自然休養林内に二つの有料キャンプ場ができた。松山営林署が四百五十万円をかけて作ったもので、モミ、ツガの木立ちにはびっしり砂利が敷き詰められ、テント二百張りが張れるが、使用料は一日大人百円、子供六十円。面河溪谷沿いの静かなところとあつて人気を集めている。(昭和45年8月14日)



自然休養林の中に作られた有料キャンプ場

今日から一般に開放

石鍾スカイラインスタート

観光開発と森林開発を狙いとする県営有料道路・石鍾スカイラインが、五年の歳月と二十億五千万円の巨費を投入してこのほど完成、九月一日、現地の上浮穴郡面河村関門で開通式が行なわれ、完成を祝った。二日から一般に開放する。

同日午前十時半からスカイライン入り口で行なわれた開通式には、久松知事ら県関係者のほか、来賓として重宗参院議長、田村建設政務次官ら県内外から約二百五十人が参加、料金徴収所に張られた紅白のテープにはさみを入れた。

このあと面河中鼓笛隊の演奏に送られ、パトカーの先導で参加者全員が数十台に分乗して通り初め。片道三分のスカイラインを、終点土小屋までパレード。あいにく小雨模様の天候でシンボルの石鍾も厚い雲に頂上の部分が隠れ景観は半減したが、参加者は山岳美と渓谷美を合わせ持ったスカイラインに満足していた。

通行料金は次のとおり。(片道)普通自動車 五百円▽小型自動車 三百五十円▽軽自動車、小型二輪、小型特殊、原動機つき自転車 二百五十円▽大型特殊自動車 千二百円▽乗り合い型自動車路線 千円▽同その他 千二百円▽軽車両 五十円▽自転車 二十円

(昭和45年9月2日)



開通式で紅白のテープにはさみを入れる久松知事と来賓(スカイライン入り口で)

押し寄せる「車の波」

土砂、溪流の美壞す

石鍾の自然開放——に、県営有料道路「石鍾スカイライン」が登場した。だが「産業発展」に「公害発生の危険」が付きまとうように、「観光開発」に「自然破壊」の二面が隠されていることは見逃せない。「車を招く」ことは「交通事故」と無縁ではない。西日本の険しい山を切り開き、標高、四九二mまで車で二気に運び上げる道路には、関係機関による万全の安全対策とドライバー自身へも慎重さが要求されよう。

面河溪の関門のスカイライン入り口から四、五キロ過ぎるところからえぐり取られた赤茶けた山肌

が見え始める。排土が道路下に流れ落ち、原生林がなぎ倒されたまま。下流の名勝、面河溪も流出した土砂で埋まった。「失われた自然」の大きさを嘆く声のあるのは当然だ。

終点の駐車場。車中で弁当をとっていた夫妻は「展望台で食事するつもりだったのに、ごみの山なのでやめました。ひどいな……」と思いました。石鍾を広く一般に開放した意義を十分認めますが、受け入れ体制はまだまだだと感じます」と感想を述べる。

(昭和45年9月15日)



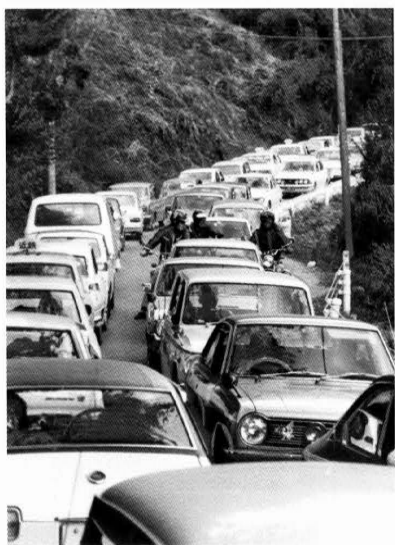
長尾尾根展望台から見た石鍾山。雲の間から天狗岳がのぞいて……スカイラインは雄大な景観をぬつて続く

紅葉狩り客で大混雑

面河溪と石鎚

紅葉狩りのピークを迎えた上浮穴郡面河村の面河溪と石鎚スカイラインは、十月三十一日の日曜日、どっと押し寄せたマイカー、観光バスで、つた返し大にぎわい。県道のあまりのラッシュぶりに、スカイラインや面河溪谷入りをあきらめて引き返す観光客も続出した。

面河溪は前日来の冷え込みで、ぐっと深さを増した紅葉のピーク。日曜日とあつてマイカー、貸し切り団体観光バスが、午前中早くも千台を越すにぎわい。午後からも途切れない車の波に、スカイラインと溪谷入り口の関門でまひ、関門から約五キロ間、面河村双田野までずらり車が立ち往生。同日、スカイラインを走った車は、先週日曜日の約千七百台を下回るおよそ千四百台となった。
(昭和46年11月1日)



紅葉狩りの客で大混雑、立ち往生してしまった車の列（面河村双田野付近で）

マイカー信者ら続々

お山の駐車場バンク

石鎚山お山市二度目の日曜日の七月八日、石鎚スカイラインは早朝から詰めかけたマイカー信者であふれ、土小屋駐車場が「超満員」となったため、信者らは長い路上駐車車の列をぬってテクル、というスカイラインオープン以来初めての風景を見せた。

快晴の同日は午前四時のオープンと同時に、徹夜組も加えて約百台が上つたのを皮切りに、同十時には八百台、正午には早くも千百台という「繁盛」ぶり。普段の観光マイカーだと目的地は土小屋で、ドライブを終えると早々と下ってくるのだが、この日は信者の車とあつて目的地は石鎚山頂。往復の四時間はたっぷり土小屋へ駐車することになった。このため、七百台が限界の土小屋駐車場は午前十時ころにはすでにバンク状態となった。
(昭和48年7月9日)



スカイライン路上にまであふれた信者のマイカー

秋を求めて人の波

紅葉の下に赤い顔

上浮穴郡面河村の面河溪は紅葉のみごろとあつてこの秋一番の人数。家族連れや団体客など約一万五千人（久万署調べ）で終日にぎわった。

真っ赤に色づいたカエデやケヤキに包まれた溪谷では、さっそく河原に降り、弁当を広げ、酒を酌み交わすグループや、山道を敷き詰めた落ち葉を踏んで散策するハイカーなど、思い思いに秋山を楽しんでいた。五色河原の釣り堀では、貸し竿約五十本がフル回転、申し込みを断るほどの人気を集めた。
(昭和49年11月4日)



弁当を広げる家族連れや、マス釣りのグループなど、深まる秋を楽しむ紅葉狩り客でにぎわった面河溪

「冬眠」終え明日再開

依然落石の恐れ

石鎚スカイラインは四月二日午前七時から、四カ月ぶりに再開される。県、久万土木事務所などでは、連日大車輪の整備作業に追われている。

「冬眠」していた四カ月間にスカイラインを埋めたダンブ三百台分という落石、土砂、雪は、十六日からの取り除き作業ではほとんど姿を消していた。しかし、スカイライン入り口から約八^キ地点道路付近から、取り除き作業後、再び落ちた大小のどがった石が、カーブごとに山側道路に、バラバラと崩れ落ちてくる。

雨の降る三月二十日も作業員がシヨベルカーで、スコップで……雪切りに汗していた。ここでも除石作業後の落石が続いているようで、車をストレートに走らせることはできない。スカイライン全線の岩壁は、水分が多く、加えてまだまだ厳しい冷え込みも予想されるだけに、岩の割れ目で凍り、それが岩を押し広げ、氷が溶ける時に落石させることが十分考えられる。

それでも落石防壁の金網が張られた所には、その後の落石は比較的少ない。一ト角が千三百円という「高価」な金網だが、小落石や土砂なら食い止めることができるだけに全線に欲しいもの。と思つて走り去った車の後方で、ザザーと土砂が滑り落ちるのに肝を冷やした。

帰路、登つていった時にはなかった新たな落石に出合った。わずか一時間足らずの間に落ちてきたものらしい。しかも上り下り線道路いづれに広がっている。仕方なく、ドスドスンと落石の上を

車は走った。同事務所では、ともかく二日再開はするが、スカイライン料金所には三人の係員を常駐させ、毎朝パトロール、道路状態によって随時通行禁止やさらには、落石箇所での山側通行止め、一方通行とするなどの措置はやむを得ないとしている。

(昭和46年3月31日)



再開を目前に整備されるスカイライン(長尾尾根展望台の上手付近)

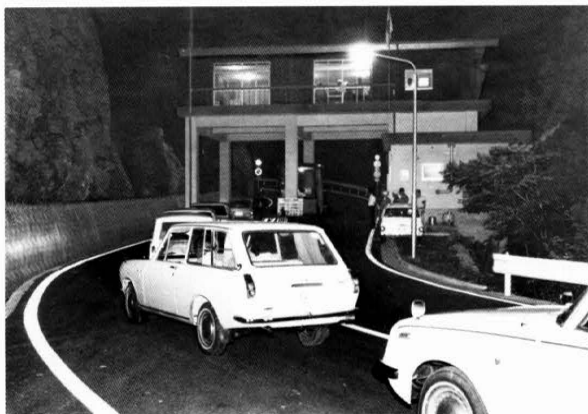
土小屋の混雑に備え

駐車場整備に全力

七月一日の石鎚山お山開きを控えた石鎚スカイラインで、六月二十九日、久万土木事務所(沼川文雄所長)は、同ライン終点土小屋の駐車場整備、臨時警備詰め所となるテント張りなどを行ない、お山開き登山に備えた。

三十日夜からの土小屋泊組と二日のゲート開き後の登山組で、ラッシュが予想されるスカイライン終点の駐車場だけに、同日は、沼川所長を先頭に、駐車場整備、線引きなどを入念に行なった。それでも、六百―七百台が限度とあつて、同事務所では、無謀登山を警戒する久万警察署とともに、徹夜の警備体制を敷くことにしている。

(昭和46年6月30日)



スカイラインからお山開きを目指す車(料金所前)

今日から開通

台風19号の被害復旧

台風19号の影響で八月四日以来通行止めとなつている上浮穴郡面河村の石鍬スカイラインは、全線にわたる大量の倒木、土砂崩壊、落石で復旧作業が難航していたが、十日から週間ぶりに開通する。六日間のスカイライン通行止めは開通後初めて。

石鍬スカイラインは台風19号の影響で、三日から降りだした雨は四日の四百ミリをはじめ、五日午前九時から十時までの二時間で五十二ミリ、六日までの三日間で七百六ミリといずれも開通後初めてづくしの降雨量を記録した。加えて風も、五日には、標高千ミリのスカイライン中点観測所で三十八ミリを記録、風速計が壊れるなどの風雨に見舞われた。

この雨と風で、スカイラインは全線にわたり倒木と落石、崩土に埋まつた。特に沿線の大木が十数本、根っこから道路へ倒れかかり、道をふ

さいだほか、折れて飛んだ小枝は至る所にばらまかれていたといった荒れよう。

さらにこれら倒木に伴う崩土や落石も、スカイラインを埋めてしまうかと思われるほどで、ガードレールが谷川へ押し流されたり、舗装道路を削り取つたりの傷跡も残した。中には防御網ごと大石を抱いて崩れ落ちた箇所もあり、固まりかけたかに見られていたスカイラインも弱点をつかれたかっこうとなった。

一方、スカイラインへの導入路も、御三戸―面河間、九カ所で土砂崩れがあつたほか、十二カ所で欠損した。しかし同線は、九日までに面河村では片側通行のほかは復旧、このためスカイラインも並行して開通を目指し、復旧作業も急ピッチで進められており、十日からは二週間ぶりに通行止めを解除する予定。
(昭和46年8月10日)

自然保護か開発か

白石知事が石鍬スカイラインを初視察

石鍬スカイラインは、面河溪関門を起点に、終点土小屋まで約十八キロ。空駆けるラインは、随所に赤茶けた岩肌が現れており、引き裂かれた原生林もあつた。

「石鍬スカイライン工事で、自然が荒らされている」日本自然協会四国支部の人たちの訴えで、白石知事初のスカイライン視察となった。

自然保護か、開発か、相反する深刻な命題に知事も、自然保護協会の女性も真剣。「経済ペー」スで早く早くという荒い工事だった。《自然の拒否反応》が出てきている。二期工事はもっと生物学者や山岳家、一般の人たちと真剣に議論して……」と慎重。
(昭和46年9月28日)



スカイラインを埋めた倒木と落石



真剣な表情で説明に聞き入る白石知事

瓶ヶ森林道が貫通

延長15^キ 自然保護に注意払う

四国山脈の尾根を、高知県境に沿って車が走る。高知営林局が建設予定の「四国山岳スカイライン」の二角、石鎚スカイライン終点土小屋(標高一四九三^ミ)から瓶ヶ森(一、八九七^ミ)を結ぶ林道が貫通した。来春からは一般車両の通行もOKの予定。

貫通した瓶ヶ森林道は、四十三年から工事着工、土小屋から瓶ヶ森氷見二千石原の下、標高約千六百^ミ地点までを結ぶ幅員四^ミ(非舗装)の約二・五^キ。県境をぬつて走るこの林道は、平均標高千五百^ミという文字どおりのスカイライン。工費約二億二千万円。

石鎚山系には約二万^ヘの国有林があるが、同林道はこれらの伐採木材の輸送など森林資源の開発のほか、登山、観光にも「役買おう」というもので、氷見二千石原下には車二百台を収容する駐車場もある。土小屋から車で約三十分、二千石原までは歩いて十分、瓶ヶ森へは四十分の登山と「手軽く」なる。

同林道は土小屋で石鎚スカイラインに結ばれているほか「よさこい峠」で高知側からの長沢林道とも結ばれており、将来は予定される西条側からの西ノ川林道とも結ばれる。さらに今後、この瓶ヶ森林道は寒風山トンネルへと伸び、国道一〇九号線と結ぶ二・五^キの林道が予定され、工事が進んでいる。この全線二・六^キ貫通は昭和四十九年の予定で、国道33号線から国道一〇九号線までを四国山脈の尾根を走って結ぶ文字どお

り「四国山岳スカイライン」となる。

一方、この開通に伴い交通事故などの心配もさ、石鎚スカイラインを警備する久万警察署では、全線にガードレール、ガードケールを設けること、カーブミラーや道路標識の取り付け、全線二十^キの速度制限などを営林局に提言している。

(昭和46年10月23日)



土小屋から瓶ヶ森への新林道

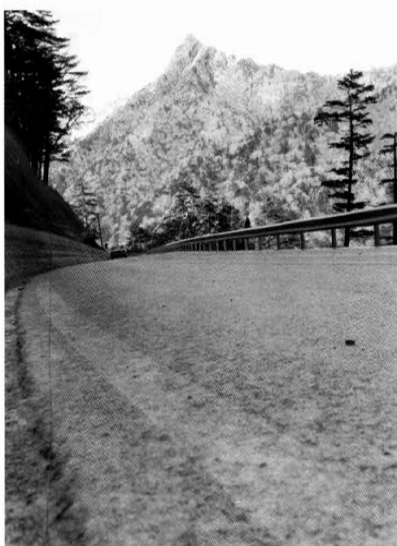
「冬眠」も間近

石鎚スカイライン路面凍る

石鎚スカイラインは十二月二十五日路面が凍結し、終日通行止めとなった。同ラインは二十三日朝も、うつつすらと雪化粧するなど足早に「冬眠」に向かい、本格的な冬の訪れを告げ始めている。

同日凍結したのは、標高千二百^ミ、長尾尾根展望台から土小屋までの約五^キ間。遠望する石鎚山頂の白い化粧はまばらで、スカイライン路面も薄く雪が凍った程度だが、その厳しさは見ただ目以上で、今月いっぱい冬眠入りする前ぶれのようだった。

こうした石鎚山の冬支度とともに、ふもと町村でも、久万町で二十三日朝、霞が見舞ったほか、連日、最低気温は零度を前後するなど、厳しい冬が予告され始めている。(昭和46年11月26日)



白く凍りついた石鎚スカイライン(長尾尾根展望台付近)

落石今年も無残な姿

整備作業も悪戦苦闘

石鎚スカイラインは今年もまた、冬眠の四カ月に崩れ落ちた土砂と岩石で痛めつけられた。四月二日の再開を目指して、目下、大車輪の整備作業が進められているものの、自然の猛威の前に悪戦苦闘している。

スカイラインにとつては二度目の冬眠だっただけに「落ちついた冬眠」に終わってくれるか——という淡い期待も見事、裏切られた。全線十八キロが「切れ目なく落石」の無残さとなった。防御網を突き破って落ちた岩や土砂は、ダンプカー三百台分といわれた昨年に劣らない。



土砂まじりの雪をかき「道づくり」

三月十八日から始まったこれら取り除き作業には、シベルカー六台、トラック十台がフル運転しているが、沿線五カ所に設けられた土砂捨て場へのUターンの繰り返しだけに、実動三千台とも四万台ともなるという。加えて、遅れて見舞った三月雪が、作業を二層、手数入りのものとし、終点小屋まで「開通」するために「週間掛かりというありさま。

取り除いた土砂、石だが、それでもなおあとへあとへ容赦なく落ちてくる。特に、わずかに防御網に抱え込まれた落石、土砂は、その防御網を、まるでカエルを飲み込んだへびの腹のように丸く大きく膨らませ、網目からスカイラインを見下ろし、無気味さを漂わせている。

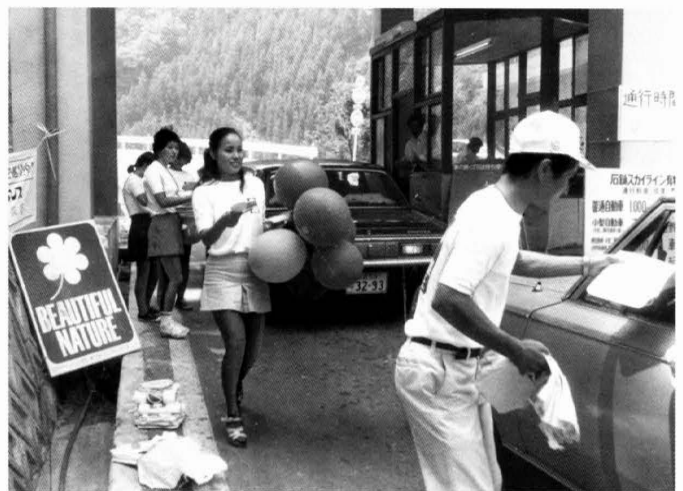
(昭和47年3月27日)

自然汚さないで!

マイカー族に「ごみ袋を配る」

「車の旅、ごみは持ち帰りましょう」と八月十二日、上浮穴郡面河村の石鎚スカイライン入り口でごみの持ち帰りを訴えると同時に、そのごみを入れる袋がドライバーに手渡された。

これはある自動車メーカーが、「美しい自然」を合言葉に繰り返し広げている提言キャンペーンの二つで、今回は観光地をごみ公害から守ろうと、ごみ持ち帰りを提言しているもので、同日は同スカイラインと北宇和郡松野町滑床溪谷で行なわれた。



ごみ持ち帰りキャンペーンでダストバッグを配る自動車メーカー社員ら(石鎚スカイライン入り口で)

同日午前十時、女子社員ら八人のキャラバン隊で石鎚スカイラインに繰り込んだ二行は「自分のごみは自分で持ち帰りましょう」と、ゲートでいったん停車するマイカーに訴え、「ごみはこれに入れて帰って」とビニール袋や小物入れにもなるサマーバッグを手渡した。

このほか、このごみ持ち帰りと、美しい自然を守ろうと約束した印のキャンペーンステッカーも配られた。

このスカイラインでは同日午後二時過ぎまでに、予定の千五百枚のダストバッグが配られ、「少なくとも道路だけはごみが投げ捨てられていませんよう」とキャラバン隊一行は念じていた。

(昭和48年8月13日)